

研究課題	図書館所蔵新大仏寺旧蔵聖教の整理・調査と 新義真言教学について
研究代表者	坂本正仁（文学部歴史学科 教授）

① 研究の目的

伊勢（三重県）の新大仏寺は、東大寺大勸進俊乗房重源の開創にかかる中世創建の古刹であり、後鳥羽上皇の勅願所、東大寺の伊賀別所として栄えた。しかし、天保の火災により伽藍の大半を失った。その後、真言宗新義派の学問所となり、大量の聖教を所蔵していた。

この聖教群に収集されているものは江戸期のものが中心であるが、中世以来の学問寺院としての性格を伝えるものであり、単に真言宗の事相、教相に関するものだけにとどまらず、広く仏教はもとより、天台宗・浄土宗・禅宗など、各宗派に関する聖教が収集、所蔵されてきた。その聖教類を大正大学図書館が購入したことにより、近世期の貴重な寺院資料の散逸を防ぐことが出来た。

伊勢新大仏寺旧蔵聖教を歴史的・文化史的研究の基礎史料とすることによって、天台宗・新義真言宗（豊山派・智山派）・浄土宗など各宗の宗学研究（仏教学的・思想史的研究）だけではなく、歴史学や国文学などの諸分野の研究者とともに、近世寺院内部の知的生産体系を総合的に解明できることが期待される。

また新大仏寺と性格の似た海住山寺は、中世より興福寺末となった古代創建の寺院であるが、やはり近世に智積院末となり新義真言宗寺院となった。この似た性格を持つ寺院の聖教を調査することを通じて、近世に於ける新義真言教学の特徴の一面を考察する。

現在総典数は422タイトル（1507点）程度ある。その全ての聖教に関して書誌データを取り、目録を作成する。データ項目に関しては、30項目を超えるデータを採取することになっている。データ採集作業に関しては、大学院生ならびに総合仏教研究所研究員・研究生を中心に行い、目録の整理・研究については各分野研究者と意見交換を行い年代・内容（宗学・歴史・国文）を検討し行っていく予定である。データ入力も並行して行っておりデータの整理・分類も方向性が明確になってくると思われる。

また、海住山寺調査も、他大学の研究者を含め、海

住山寺中興の貞慶聖人の御遠忌のために、数年にわたり調査を行ってきたが、大正大学の学生にとって現地調査の機会が無いこともあり、その経験を積ませる教育的目的もあり、また新大仏寺聖教とそこに見られる新義真言教学を検討する対象物として、本研究において聖教調査を実施する。

本研究の学術的な特色は、第一には新大仏寺旧蔵聖教類や海住山寺所蔵聖教は近世における知的再生産の構造を明らかにする重要資料であることがあげられる。この資料は同一の寺に所蔵され、伝来してきたという意味において、その聖教群の全体としての体系的に把握でき、また個別の聖教としても勿論重要な研究対象となる。殊に新義真言宗寺院に伝来した聖教群として、新義真言宗の学問所における知的体系の総体を復元する貴重な資料ということが出来る。これまでの新義真言教学の研究は、その総体的な把握という面において不十分であった。これを補うことが、本研究の最終的な目的であり、学術的な一番の特徴であるといえよう。

第二に印刷文化・出版文化研究の視点からも高い注目を集めている。それは何時・どのような出版（印刷）がなされ、それがどのような形で流通したのかという問題である。生産者（出版元としての寺社や町判の版元である書肆）と、消費者・享受者（京洛および地方寺院・僧侶）などを繋ぐ、文化的・社会的・経済的状況に注目したい。このような意味からも、長期間にわたって多くの版本を収集してきた過程は、この出版と流通の問題を明らかにするものである。

② 研究の経過

継続作業として、大正大学蔵新大仏寺聖教類と海住山寺所蔵文書の書誌データの採譜および入力をおこなった。大学院生を中心に大学院研究生、総合佛教研究所研究生・研究員が参加して昨年度より書誌データの採譜作業とデータ入力を中心に作業を進めている。

調査の採譜項目は資料ID・名称・旧所蔵・辞典へ

の掲載（『仏書解説大辞典』『国書総目録』への掲載の有無）・完本と欠本の別・外題・首題・尾題・法量（縦・横）・紙数（丁数・頁数）・表紙等・料紙・紙色・装幀・刊本と写本の別・書写者・版刻者・界線（界高・界幅）・印記・書写・刊行の年代等・紙背・張紙・訓点等・図像・書入れ等・諦語・奥書・刊記・その他・備考などにわたる。

新大仏寺聖教については戒律関係の書目から始め、既に 200 点以上のデータ採譜が終了している。

現在、平行してエクセルでのこれら 30 項目におよぶデータ入力を行っており、これを元に整理分類を進めていく予定である。

また、本年は新大仏寺だけではなく、海住山寺実地調査を行った、研究成果で詳細について報告する。

③ 研究の成果

まず、本研究の研究対象となっている 2 つの寺院「新大仏寺」「海住山寺」について述べておきたい。

新大仏寺については昨年度報告しているのので、概要を以下に述べる。

新大仏寺の建立時期についてであるが、新大仏寺は俊乗房重源の草創とあり、建立に関する記述が数点見られる。『南無阿彌陀仏作善集』『丈六佛像員數』には、東大寺伊賀別所として丈六の来迎彌陀三尊像を安置した堂宇、釜を備えた湯屋と金色の三尺如来立像等を安置した御影堂があったことが記されている。

また、『大日本史料』四編之七及び『俊乗坊重源史料集成』所収『伊水温故』には重源によって建仁 2 年（1202）に新大仏寺が建立されたことが記されている。

現存する重源の「新大佛寺板五輪塔」の銘文には建仁 3 年（1203）9 月 15 日の記述が見られる。伊勢・志摩・伊賀の地誌である『三國地誌』では新大仏寺は建久 7 年（1196）に建立したとあるが、他の文献から考えて建仁 2 年（1202）には新大仏寺諸堂の何れかは建立されていたと考えるのが適当である。さらに新大仏寺が寛永の末に本堂破壊し、礎石のみが残っていることがわかる。

他の記録では、松尾芭蕉が貞享 5 年（1688）に記した『笈の小文』には芭蕉が新大仏寺を尋ねた際に、余りの荒廢を嘆いている。伽藍はなくなり礎石のみが残り、僧房は田畑とかわる。尊像は苔に埋もれ、髪の部分だけ拝むことが出来る。重源上人の尊像だけは残って、往時を思わせる。尊像の蓮台等が埋もれ、まるで釋迦の入滅後のような寂れ方であると記している。

以上のことから新大仏寺は寛永年間（1624～1643）の末に本堂が崩壊し、その後松尾芭蕉の記述まで約 40 年間も修復されなかったことが判る。

それでは、近世末に新大仏寺はどのように多くの聖教を保有する大寺院へと再興していったのであろうか。

衰残の当寺を復興しようとして延宝 9 年（1681）9 月 22 日、時の富永村庄屋彦右衛門が裏山の太山を、今までと同様に太山殿諸堂の修理用に充てたいと、同山の下賜を嘆願している。この記述には寛永 12 年（1635）5 月 12 日の大風雨によって大破したことが示されている。しかし、復興の記録がないことから、この時点では復興の願いは叶わなかったようである。

この後、享保 11 年（1727）に陶瑩が唯一残った坊、東の坊の住職に入ると、復興に大きく進展する。新大仏寺に伝わる享保 12 年（1727）4 月 23 日に書かれた太山再営願書「奉願太山再営之事」には次のようである。新大仏寺再営にむけて、勸進の許可を願ったのである。許可の後、太山之御首、俊乗坊之像、千体仏、毘沙門、舍利塔、焰浮壇金之観音の 6 つの寺宝を持って勸進してまわった記録が残っている。

新大仏寺復興は、陶瑩の代ではかなわず、次の宝梁へと引きつがれた。そして延享 5 年（1787）4 月 19 日上棟、寛延元年（1748）10 月 27 日に入仏した。宝梁 72 才、発願より 23 年の月日が経っていた。寛永の大風雨により大破した堂宇は、110 余年ぶりに再興したのである。

以上のように、江戸中期に倒壊した新大仏寺は陶瑩・宝梁によって再興された。しかし、江戸後期の記録には「新大仏寺」という記述はそれほど多くない。

新大仏寺の呼称についてであるが、『伊水温故』や『三國地誌』では「五宝山新大仏寺」と書かれていた。呼称では「新」を取って「大仏寺」などとも呼ばれていたようである。

新大仏寺には『三國地誌』によれば、盛時 12 を数える坊があった。その中で荒廢した後も唯一残っていたのが東ノ坊である。陶瑩が享保 11 年に東ノ坊の住職になり、新大仏寺再興の願いを立てた事からも、実際に新大仏寺の管理を行っていたのは東ノ坊であったと考えられる。

再興の後「新大仏寺」の寺号が使われなかったのは延享 3 年新大仏寺再建の見通しが立ち、平田の文珠院の世話で、京都嵯峨野の大覚寺の末派に加えられることを嘆願する際に関係している。その口上覚書で寺号について、先年「東の坊」にて書き付けて申請したが、その後今年改めの際、古号である「新大仏寺」名で書

き付け提出した。しかし、明和3年(1766)11月21日、一音が住職継目として本寺証文を藩に提出したところ、新大仏寺の名称は不都合であるとして許認されなかったのである。幕府は、たとえ旧記由緒あるとも半途にて廃絶の場合は、寺号山号ともに廃絶とみなした。また再建の場合も新寺同様に取扱うという通達であった。これには、新寺建立に対して徹底的な管理政策をとってきた江戸幕府の宗教政策の一端が見て取れる。以後、新大仏寺の呼称を使用することが許されず、東ノ坊の名称が新大仏寺の名称に取って代わったのである。

今回の大正大学図書館蔵新大仏寺聖教採譜作業は平成22年11月25日～12月10日に大正大学にて行われた。作業内容は聖教類28点の採譜作業を完了した。『成實論』7冊・『成唯識論述記序』2冊・『成唯識論俗詮』10冊・『起信論義記幻虎録』5冊・『起信論義記幻虎録解謗』1冊・『起信論義記幻録弁偽』3冊である。

次に海住山寺の報告である。

海住山寺に関しての先学研究は以下の通りである。今回の研究対象となっている文書関係のものは、古くは『史学雑誌』第70編2号所収資料紹介「海住山寺文書」佐脇貞明著がある。ここでは解脱上人貞慶(1155～1213)自筆のものを含む14点について紹介されている。これらによって当時の海住山寺の状況を知ることが出来る。近年においては「興聖寺一切経における訓点資料について—その伝来を巡って—」『鎌倉時代語研究』第25輯(2000年)にて海住山寺旧蔵の貞慶所蔵一切経を調査し、その伝来を報告している。また寺社聖教のデジタル撮影・デジタルアーカイブ作成に実績を積んでいる。さらに近本謙介氏は、「貞慶伝とその周辺—海住山寺文書等をめぐって—」(『佛教学』第24号、2000年3月)海住山寺文書を用いた貞慶の伝記研究を発表しており、海住山寺の南都系寺院としての性格を発表している。

海住山寺は京都府南山城の当尾(瓶原)に在り、東大寺を開創した良弁(689～773)の開基と伝えられ、元は東大寺の末寺であったが、いったん焼亡した後に解脱房貞慶(1155～1213)によって復興され、興福寺の末寺となったとされる。秀吉の検地以降、寺勢も衰微したが、現在は真言宗智山派に属している。

海住山寺と智積院の関係が何時頃から始まるのかは、未だ判然としてはいないが、明治に入ってから佐伯隆範が興福寺大乘院の令旨を以て海住山寺住職に補任されていることからすれば、寺院としての海住山

寺は、明治初期まで興福寺の末寺であったということになる。

佐伯隆範(1849～1905)は、現在の智山派を形成するに到る離加末運動を推進した中心人物の一人であり、高尾山薬王院・川崎大師平間寺の住職を勤めている。真言宗では、地方寺院の本末関係は古代・中世以来の事相本山との関係を中心に結ばれていたのに対し、その寺院に住する学侶の修学は教相本山である新義の智積院・長谷寺と古義の高野山金剛峯寺において行われており、その中で学問の修学体制による新義派・古義派の教団化が進んでいた。離加末運動とは、それまでの寺院の本末関係を離れ(離末)、新たに住侶が属していた教学的教団組織と同じ教相本山との本末関係を結ぶこと(加末)であり、これによって現在の真言宗智山派・豊山派が形成されてきたものである。興福寺大乘院の令旨によって海住山寺の住職となった佐伯隆範であるが、早くから智積院において修学しており、それが離加末運動によって海住山寺そのものも智積院の末寺になったと考えられる。

海住山寺には、貞慶以来の興福寺末であることを示す文書類が伝来しているが、その他に一群の聖教類が存在する。これらの聖教類は江戸末から明治初期にかけて、智積院第三十六世となった範恵(1788～1850)や佐伯隆範(範真)などの書写・相伝・収集によるものが中心となっている。殊に教相関係・論義関係のものは、近世末を中心とした智積院、或いは真言宗新義派との関係を示すものが見られる。もっとも科研報告書『智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究』(平成20年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、平成23年3月、研究代表宇都宮啓吾)の中で、大谷由香「智積院新文庫所蔵の戒律関係聖教群について」の指摘するように、天正年間の根来焼き打ちの後、慶長年間に洛東に再興された智積院において、再興当初に集積された聖教の中に、海住山寺由来のものが多数含まれていることからすれば、智積院と海住山寺との教学的関係は根来時代から継続していたことも考えられる。現在は海住山寺所蔵聖教についても悉皆調査の途上であり、全体像把握のための棒目録作成に向けた書名確認調査を行っている段階に過ぎない。その意味では、海住山寺聖教の性格を断定的に言うことはできないが、大正大学図書館の一括購入した伊州新大仏寺聖教群とも一種の共通な性格を認めうるものと考えられる。

海住山寺に伝来するこれらの聖教群は、貞慶時代以来の文書や道具類を納めた「表ノ蔵」に対して、「裏

ノ蔵」と称される庫裡の裏に在る土蔵の二階に納められている。ここには聖教だけではなく、古い法衣や幕などの道具類、更には近代に入ってから雑誌類、レコード・蓄音機、近代の文書類などや、更に明治以降の智積院における智山大学林（後の智山専門学校、後に大正大学に合併）で用いられたと思われる西洋諸学の教科書の類などが存在する。現在の調査では、これら聖教以外のものに関しては除外し、同一箱内に在ったものは別の近代箱に移して別置しており、そのために箱番号や箱内番号の一部が抜けるものがある。初め版本類から調査を開始し、複数巻のあるものも一枚の調書に一括記録してきたが、現在は江戸期の本筆筈に納められている事相関係聖教の調査に移っており、これらは写本であるため一点ごとの調書作成が必要となり、箱数・点数としての調査の進行はペースダウンしているものの、調書の枚数は数倍となっている。

本年度の調査（平成23年3月20～23日）では、仮箱番号第27箱の後半から第28箱の調査を終わらせた。第27箱は総点数（箱内番号）105点、そのうち今年度調査分が31点（1点の中に複数巻・冊を納める包物や帙・畳入りのものが在るために、実数は32点、32枚の調書となる）であった。また第28箱は、不明の断簡を含めて総点数（箱内番号）220点（実数（調書の枚数）では約670点に上る）となる。

これらの中で近世真言教学史上の資料となる一例を挙げれば、第28箱第4号の1「豎義記録 野山記」～18「伝法大会一問 宝珠譬喩／五義法數」は佐伯隆範相伝の論義関係資料であるが、文化（1804～1818）・文政（1818～1830）・天保（1830～1844）年間に書写された聖教は範恵の相伝したものであり、これらが隆範（範真）へ相伝され、また隆範が明治に入って書写をされた写本（書写者は未詳）を加えて一括しており、海住山寺における師弟間の聖教の相伝過程が窺われる。これらはまた近世末期の論義法会の具体的な作法・様相が知られるものであり、智山書庫には論義法会の所作・作法に関する記録の乏しいところからすれば、その点からも貴重な資料と言える。ともかく範恵相伝の聖教は、海住山寺聖教の中でも重要な位置を占めるものではあるが、またそれ以前に遡ると思われる写本も多く存在し、今後、智積院聖教との照合によって、智積院聖教それ自体の成立過程の一面を解明することが期待される。その意味でも、書名確認・棒目録作成の後には、更に詳細な書誌調査を実施し、海住山寺聖教全体の悉皆調査の完成が望まれるものと言えよう。

④ 研究の課題と発展

大正大学図書館が購入した伊州新大仏寺旧蔵の聖教群は、現時点で433タイトル（1507点）が確認されている。平成22年度で大部分の聖教が購入された。

4年にわたって継続してきた新大仏寺聖教採譜作業中の結果、新大仏寺聖教群の一面に、収集の偏りなども見られることがわかった。

前述の採譜報告を踏まえ、継続して採譜作業・データ入力・目録作成を中心とした研究活動を続け、昨年来課題としてきた他寺院聖教群との比較を行うために、本年度調査した海住山寺聖教の悉皆調査を平行して行い、これらの目録を作成することを第一の課題としたい。

その後、目録の比較を行い新大仏寺・海住山寺聖教全体の生成過程を分析し、各寺院がどのような経過から真言宗寺院へ移行していったかの過程を考察する。また新大仏寺・海住山寺以外の新義真言宗系寺院の聖教についても、新たな調査を実施していく予定である。それによって南都系寺院と根来寺、あるいは新義真言宗との歴史的・教学思想的な関係を解明する道筋が示されることになろう。

参考文献

『智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究』

（平成20年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、平成23年3月、研究代表宇都宮啓吾）

資料紹介「海住山寺文書」『史学雑誌』第70編2号所収 佐脇貞明著 昭和36年

「伊賀新大仏寺の経営」『俊乗坊重源の研究』所収 小林剛著 昭和46年

「伊賀新別所新大仏寺に就いて」南都佛教研究会編『重源上人の研究』所収 村治圓次郎著 昭和30年